

アトリエ 琉游舎 だより 161号

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/

2023年9月13日発行

琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3>



韓藍

(からあい)

鶏冠花

(けいかんか)

鶏頭花

(けいとうげ)



- 鶏頭の古名が韓藍です。外来の藍の意味で、紅色の花汁をうつし染めに用いたところから呼ばれたようです。鶏頭は花の柄の上部は著しく広がって鶏のとさか状になりその両面に赤・紅・黄・白色などの小花が密集して咲く、観賞用に古くから栽培されている植物です。
- 形状が鶏の頭に似ていることから、鶏頭、鶏冠花、鶏頭花。とても分かり易いネーミングです。また学名のCelosia (セロシヤ) は燃焼というギリシャ語由来の言葉で、形や鮮やかな色が燃える炎のように見えることが理由のようです。
- 染料に使われ韓藍と呼ばれていた昔から歌によく詠まれていました。万葉集に「秋さらばうつしもせむと吾が蒔きし韓藍の花を誰か摘みけむ」とあります。秋になったら染めようと思って蒔いた韓藍の花を、誰が摘んでしまったのだろう。(私の恋したあの娘は誰のもとに行ってしまったのか!) どうやら失恋の歌のようです。
- 子規も鶏頭を句によく詠んだようで、死ぬ直前の句会で作句した「鶏頭の十四五本もありぬべし」があります。これは秀句か駄句かで長年に渡って俳人、歌人間で論争になった句のようです。論争の詳細は私にはあまり興味がないので、この句の評価のしようがないのですが、ただ情景描写の句か、鶏頭のイメージを自分に重ね合わせ、いのちの炎の尽きる感慨を詠んだ句なのか、短詩形はどのような解釈も読み手に可能であることがよく分かります。
- 子規には「鶏頭に霜見る秋の名残かな」という句もあります。私は俳句の素人ですが、この句には「霜」が冬「鶏頭」と「秋」が秋の全部で3つの季語があるようです。2つ以上の季語は句作では禁じ手のはずですがこれは問題ないようです。規則と自由の二つが共存できる短詩の世界は規律正しいながらも自由も捨てがたい日本人の気質そのもののようです。

秋の彼岸会法要 9月24日(日) 10時半 琉游舎にて

9月・10月スケジュール

9月・10月スケジュール			14	15	16	17
月	火	水	映画会 13時半から			
18	19	20	21 映画会 お休み	22	23	24 彼岸会法要 10時半
25	26 読書会 13時半から	27	28 映画会 お休み	29	30	10月1日 写経会 13時半から
2	3	2	5 映画会 お休み	6	7	8
9	10 読書会 13時半から	11	12 映画会 13時半から	13	14	

読書会

9月26日
10月10日
(火) 13時半

写経会

10月1日
(日) 13時半

映画会

変則日程です

先日5年ぶりに中学校のクラス会を開催することとなり、案内の往復葉書を送付したところです。50歳を過ぎたあたりから私を含めて、子供の手間もかからなくなり、生活も安定し、あるいは先行きがだいたい見えてきたところなのか、過去を振り返ってみたくなるようです。その頃から私たちのクラスは会をワールドカップの年に開催しようと言うことになり、4年おきに集まってはかつてを懐かしみ、そして今の自分の位置を確かめるということを繰り返してきました。昨年はまだコロナが収束しないということで、1年延期となり、それが今回の5年ぶりの開催案内となったところです。前回は還暦同窓会という名のもとに、単独クラス会ではなく氏家中学校昭和48年度卒業生9クラス400名余りの会を担任の先生方を招待してホテルで開催しました。

案内の漏れがないように各クラス幹事が現住所を整理した結果、ほぼすべての方に案内状を送付できました。その過程で亡くなられた方も明らかになったため当日はその方々のお名前を読み上げることにいたしました。先生方は9クラスの担任中2名の方が亡くなられていたのは年齢的に致し方ないのですが、同級生も各クラス1~2名程亡くなられていました。これが日本人の同世代から見て多いのか少ないのか分かりませんが、私のクラス3年3組だけは突出して多く、男子26名中6名が亡くなられていました。まだ60歳前での逝去です。それから5年後の今回、さらにまた2名の方の名前を名簿から削除しなければなりません。65歳にして男子26名中8名の死亡、30%の死亡率です。これは明らかに高率です。実は私も昨年11月に9人目の名簿削除者になっていたかもしれません。ドクターヘリと高度医療技術のお陰で緊急手術が成功し、今こうして私は他者の死を名簿から削除する行為を通して、己の「生」を現実のものとして実感しているところです。

名簿はその集団の構成員を証明するものです。逆にその記載から削除されると構成員ではなくなるということです。ある組織や集団から脱退するとその名簿から削除されます。私たちも生者の集団から脱退すると公的な名簿、例えば戸籍や住民票、年金などの名簿から削除などの書き換えが行われます。私的な名簿をあげれば通帳やカード、様々な会員、同級会名簿も然りです。この名簿から死によって強制的に削除されることは、生者にとっては耐えがたい苦痛に違いありません。しかしそれは死者が感じる苦痛ではなく生者が死に直面するときあるいは死を考えざるをえなくなったときにある苦痛です。そして身近に死者を迎え入れざるをえなくなった残された生者が感じる苦痛です。死は生者が必ず誰もがくぐり抜けなければいけないところです。くぐり抜けた先の世界はもう誰も経験のしようがない処です。経験のしようがないものについて本来生者は語りようがなく、死の経験者である死者はそれを語る術を持つことができません。私たちが経験のしようのない世界へ抱く不安や苦痛や恐怖が、生者が死を忌避し生へと駆り立てる原動力となり、「死」があることによって「生」を生きることが可能となっているに違いないとすれば、私たちは死にゆくために今があるとも言えるでしょう。であれば私たちに与えられた生き方はよりよく死にゆくためによりよく生きることではないでしょうか。9人目の名簿削除者になったかもしれない私が7人目と8人目の死者を名簿から削除しながら今とりとめもなく綴っていることは、死を意識することが生きることではないかということです。

生者の名簿から削除された死者の名簿は存在するのでしょうか。この名簿は死者が死後にも存在する場所があることを保証するものです。生者が安心して生を生き、心安らかに死を迎え入れることができるように、生者が作る生者のための死者名簿です。墓や位牌は一族の死者名簿、過去帳は寺が作る地域の死者名簿です。毎日位牌に向かうことや月命日、49日、1周忌、3回忌、33回忌などの年忌に死者を供養することは、生者が死が誰にも平等に訪れることを認識し、死を受け入れざるをえないことで、今ある生をよりよく生きingことを願い誓うことです。名簿にある死者を永遠のいのちとして生者の生命の中に取り込むためのものです。

死者の名簿の存在があるということは死後の魂の存在を認めることと同じことになるかも知れません。死者供養は魂の存在を信じているから行われているはず。仏教が長い時を経て今も存在できているのは、魂の存在を信じる人たちの要望をみたし、魂を供養する役目を担っていたからなのでしょう。死んでも魂が存在しそれを生者が供養してくれるという安心感があるからこそ、人は死を受け入れることができ、よりよい死を受け入れるためによりよい生を望みよりよい生を全うしようとしてきたのだと思います。私が再三この場で述べてきたように仏教は死者のためにあるのではなく生者のためにあるものです。

私は魂の存在について語ることは致しません。お釈迦様は魂の存在を認めていません。仏教の教えの根本は諸法無我です。固定的な普遍の存在はないという考えです。死者供養は仏教の本質からはかけ離れたものであると見えるかも知れません。恐らく宗教の中で魂の存在を認めていない宗教は仏教だけでしょう。仏教は魂の存在を否定しながら魂の供養を行い続けてきてここまで存在してきた矛盾を私は解決する術もありませんし、また解決する必要もないと考えています。魂というと私たちは固定不変不死の存在と考えるでしょう。しかしお釈迦様は諸法無我、全ては因縁縁起によってあると語っています。物理的な命の終焉（死）の後に残されるものはいわゆる「魂」ではなく仏の教え、つまり法です。空や真如やありのままにあるものです。その法が肉体の生から離れて人々（生者）の生命の中に取り入れることが、永遠のいのちを繋ぐと言うことです。仏教の法要は不変不死の魂を供養するのではなく、かつて生者であった人々 琉游舎：戸井 出琉・恭子 が仏となるための日々を過ごした生命（日々の営み）を、永遠のいのちとし 問い合わせ：0287-53-7848 08033508152 て残された私たちが頂くことです。僧侶は死者の名簿を書き加えることで 矢板市大槻2319-17コリーナ矢板C-850 その方の永遠のいのちを頂き、生者にそれをお渡しする役目の者だと信じています。 メール：toi101izuru@outlook.jp